

2007 年卒業

西南学院大学神学部神学科選科 修了論文

指導教官：松見 俊 教授

【 題 目 】

バプテスト派の日本宣教における“Bible Women”の働きとその実態

— 明治から昭和初期、そして戦後の“Bible Women”を追う —

学 籍：07SA002

氏 名：神谷 武宏

【目次】

はじめに	2
「バイブル・ウーマン」とは何か <本論文の動機と目的>	2
第一章 「バイブル・ウーマン」の始まり	3
第一節 バプテスト派による日本宣教のはじめ	3
第二節 バイブル・ウーマンの起こり	4
第二章 バイブル・ウーマンの働きに見えるもの	6
第一節 献身的な働き	6
第二節 バイブル・ウーマンの光と影	8
第三章 その他、戦後の「バイブル・ウーマン」を追う	10
第一節 戦後のバイブル・ウーマンと思われる方々を尋ねて	10
第二節 バイブル・ウーマンについてF. C. パーカー氏とのQ&A	12
第三節 アジアにおけるバイブル・ウーマンの働きを追う	16
結 論	18
「バイブル・ウーマン」とは何だったのか<考察>	18
おわりに	19
今後の課題	19
参考文献	20
バイブル・ウーマンに関する英語資料から	20
参考文献紹介	24
*バイブル・ウーマンに関する文献	
*その他の文献	

文字数 43×36
総文字数 30,217

「バプテスト派の日本宣教における“Bible Women”の働きとその実態」

— 明治から昭和初期、そして戦後の“Bible Women”を追う —

神谷 武宏

はじめに

「バイブル・ウーマン」とは何か＜本論文の動機と目的＞

明治初期の時代は、宗教においても例外なく激動期であった。明治政府は徳川幕府のキリシタン弾圧を引き継いだ。開国と引き換えに不承不承において信教の自由を保証したと言われる。¹

米国の宣教師は、そのような社会情勢の中で、日本での宣教を進めていく際に、言葉や文化の違いなども含めて大変困難を極めていた。地道な戸別訪問においては、異国の神というイメージは拭い難く、特に「日本の女性たちに近づき、そのうえ信頼関係を勝ち得ることは男性宣教師の働きだけでは大変難しかった」²と言われる。明治の女性が「良妻賢母」といわれるゆえに、異質なものの警戒心はより強かったのかも知れない。そこで女性宣教師、又は宣教師「夫人」らがその働きに大いに健闘するのだが、ただその大半の女性宣教師らは単独で働いたのではなかった。独身の日本人女性（求道中、または受洗者）を雇い、自ら聖書などの教育を施し、または女子神学校で学んだ者を雇って、日本人女性とパートナーを組み、伝道する地域へと入って行ったのである。すなわち、伝道活動の協力者として土着の（native）³日本人女性が雇われていった。

宣教師側は、この働き人たちのことを「バイブル・ウーマン」⁴と呼んでいる。

¹ 坂井信生著『明治期長崎のキリスト教 カトリック復活とプロテスタント伝道』長崎新聞社、2005年、p.64より参照。

² 枝光泉「バプテストの女性の歩み」（『世の光』2005年4月号）日本バプテスト女性連合、2005年、p.16。

³ 「土着“native”」という言葉に、しばしば「軽蔑」の意味合いが含まれるが、拙論の第3章・第2節の「F.C.パーカー氏とのQ&A」の中で、パーカー氏は日本人に対し「土着」という言葉を用いており、また「宣教地では、階級制（hierarchy）が存在し、バイブル・ウーマンたちは、牧師たち、学校の教論たち、看護師たち、その他の下位に位置する最も下の位置付けのスタッフでした」とあるように、当時の宣教師たちには多少なりとも「軽蔑」した思いがあったと考え、ここで「土着」という言葉を記している。しかし一行前に記した「パートナー」には、「同労者」としての信頼性が伴っていたことを意味し、「差別的」な意味合いとの複雑な絡みがあったことを含めている。

⁴ バイブル・ウーマンについての一つの見解。鈴木正和「偕成伝道女学校、共立女子神学校、そしてバイブル・ウーマン—失われた姿を求めて—」（『共立研究 Vol.VII No.1』東京基督教大学共立基督教研究所 2001年8月31日）の論文に記述されている鈴木氏（自由学園教員・中央聖書神学校講師）の見解を記す。「バイブルウーマン（Bible Woman）はバイブルリーダー（Bible Reader）と同義語であり、Oxford English Dictionaryによると Bible Reader は『家から家へ聖書を読むために雇われた婦人』とある。宣教地において、バイブルウーマンは主に現地人の婦人伝道者を指したが、本来はこの言葉に現地人という枠はなくすべての伝道をする婦人またはキリスト教の働きをする婦人を指す言葉であった。今日的な言葉で言えば、クリスチャンのソーシャルワーカーであった。今日の日本では、バイブルウーマンやバイブルリーダーという言葉は聞きなれない言葉である。時代と共に日本においてのバイブルウーマンの働きが、宣教師および日本人牧師の助手から、次第に

それは、バプテスト派の宣教に限らず、「他の教派においても広く用いられ、彼女たちの働きなしには教会形成もままならなかったほど重要であった」⁵ と言われている。しかし、そのような重要な働きを成したにもかかわらず、殆ど知られていないのが現状である。その一因は、彼女たちが日本の教会に属さず、宣教師側に雇われていたからであった。そのため、日本側の資料に「バイブル・ウーマン」の名称で記された報告書が殆どなく、僅かに米国側の資料に断片的に残されているのみである。さらに彼女たちの働きについて固有名詞での記述はそれほど多くはなかった。例えば、宣教師たちが報告書の中でバイブル・ウーマンに言及する時、「わたしのバイブル・ウーマン」、「〇〇のバイブル・ウーマン」とか、または「わたしのヘルパー」と記している⁶ ため、そのバイブル・ウーマンがどこの誰なのか知ることが出来ない。ただ幸いにして、一部の女性宣教師たちの報告書の中に固有名詞付きの記述が見られ、これらによって、明治からのバイブル・ウーマンの果たした役割を、多少なりとも知ることができる。

私は、これらの資料に基づき、その知られざる「バイブル・ウーマン」と呼ばれた女性たちについて知る必要性を感じてならない。何故なら、日本の宣教活動において、宣教師たちの働きが感謝されているように、本来なら彼女たちも宣教師と共に献身的に働いた「同労者」として名を残し、同等に感謝されるべきではなかったかと思えてならないからである。

それは何か、聖書の中の女性たちのことを思い起こさせる。実際は存在したであろう名も無い、または数に含まれない、女性の信仰者、伝道者、イエスの弟子などである。またその後の歴史においても女性の働きは歴史上から消され続け、そして近年においても同じ過ちを犯し続けようとしている。

以上の事柄を踏まえて、限られた資料からではあるが、バイブル・ウーマンと呼ばれた女性たちについて、その働きと実態を調査し、「バイブル・ウーマン」とは何だったのか、という真実に一步でも近づくことが出来ればと思う。そしてさらに考察を試みていきたい。

第一章 「バイブル・ウーマン」の始まり

第一節 バプテスト派による日本宣教のはじめ

1609年、信仰の自由を求めてイギリスからオランダに渡った人々によってバプテストの歴史が始まった。1612年にはアムステルダムからロンドンに戻ったイギリス人によって最初のバプテスト教会がイギリスに設立される。そして、オランダとイギリスからアメリカに渡ったバプテストの信徒たちによって、アメリカにおけるバプテストの基礎が築かれた。その後、アメリカにおい

教会や伝道所の伝道師と変化していったこともあり、ついに定着した日本語訳はできずに、時に応じて『婦人信徒伝道者』、『婦人伝道師』、又は『ワーカー』と使い分けられた。」 p.9。

⁵ 枝光、前掲書、p.17。

⁶ 宍戸朗大著『バプテスト派の初期伝道誌 東北伝道とバイブル・ウーマンの活動』耕風社、1995年、p.184より参照。

て外国宣教に気運が高まった時、バプテストも東洋宣教に着手し、その宣教地はビルマ、インド、中国、そして日本へと広がっていった。⁷

1858年に日米修好通商条約が締結され、その第八条に「日本に在る亜米利加人自ら其国の宗法を念し礼拝堂を居留場の内に置くも障りなし並びに其建物を破壊し亜米利加人宗法を自ら念するを妨る事なし・・・」⁸と定められた。米国の宣教団はこの条約に従って、日本に駐留する外交官や居留地に在住する自国民のためとし、宣教師の来日が続いた。⁹

バプテスト派による日本宣教の始まりは、1853年7月11日、J. ゴーブル (Jonathan Goble, 1827-96) がペリー艦隊の海兵隊員として一度来日し、7年後の1860年4月1日、今度は米国バプテスト自由伝道協会 (ABFMS) の宣教師として再び来日する。この1860年という年は、米国南部バプテスト連盟もまた、J. Q. A. ローラー (John Quincy Adams Rohrer, 1831-60) 夫妻を送り出しているが、しかし8月3日、エドウィン・フォレスト号で出帆したまま太平洋上で行方不明となっている。¹⁰

1860年、米国バプテスト自由伝道協会がJ. ゴーブルを日本に派遣した事は先に述べた。しかし彼は来日した後、本国からの支援を得ることが出来ず、靴職人、建築、通訳、通商などで自らの生活を支えながら聖書の翻訳に努め、1871年秋、日本で最初の『摩太伝 (マタイ伝)』を翻訳出版する。そして同年には帰国するが、日本開教の気運の高まりを感じると、彼は帰国後、日本に宣教師を派遣する運動へも挺身していった。さらにその2年後、J. ゴーブルは三度日本へと赴くのである。¹¹

第二節 バイブル・ウーマンの起こり

バプテスト派の宣教が日本にて本格的に始められたのは、1873 (明治6) 年2月7日にJ. ゴーブルとN. ブラウンの両家族が横浜に到着した時からであった。同年3月2日に両夫妻の4名で横浜浸礼教会を組織する。J. ゴーブルは、以前宣教師として11年間活動するが、1873年のユニオンの年次報告書の中で、「横浜に居住していたゴーブル氏の活動からは信徒は生まれておらず、チャペルも、また宣教師の住宅もなかった」¹²とあり、如何に単独での伝道が難しいかが伺える。二組の宣教師夫妻の後、次々に宣教師が来日する。同年10月に来日したJ. H. アーサー宣教師夫妻は、東京で伝道进行中、「二年目で最初のバプテスマを行った。バプテスマを受けたのは内田ハマで後年、仙台の尚綱女学校の舎監として名を残した人物であった」。¹³ その内田ハマは、1875年以降、宣教師「夫人」のバイブル・ウーマンとして伝道に携わって行く。バプテスト派のバイブル・ウーマンとしては実名で残されている最初の人物である。内田ハマは、資料¹⁴

⁷ 宍戸、前掲書、p.15より参照。

⁸ 高橋昌郎『明治のキリスト教』吉川弘文館、2003年、p.7。

⁹ 大島良雄著『バプテストの東北伝道 1880-1949年』ダビデ社、2005年、p.7より参照。

¹⁰ 枝光泉著『宣教の先駆者たち』ヨルダン社、2001年、p.18より参照。(以下、『宣教の・・・』とし、出版社名、発行年を省略する。)

¹¹ 大島、前掲書、p.9より参照。

¹² 大島良雄著『日本につくした宣教師たち』ヨルダン社、1997年、p.8。(以下、『日本に・・・』とし、出版社名、発行年を省略する。)

¹³ 大島、前掲書、p.14。

¹⁴ 大島良雄著『灯火をかかげて』ヨルダン社、2002年、p.368。(以下、『灯火・・・』とし、出版社名、

によると東北、北海道の各地をバイブル・ウーマンとして伝道している。特徴的な出来事として、アイヌの人々の文化と暮らしに触れながら、実際の伝道が成されたと記されている。

次に、1875年11月に来日した独身の女性宣教師C. A. サンズは、教会の伝道、教育活動に精力的に従事した。サンズは日本の女性たちに接触する方法として戸別訪問を採用し、日本人の数名の女性を協力者として養成し、彼女たちを訪問伝道に活用することで成果を挙げた。1878年に書いた手紙の中で、「私は今、三名のバイブル・ウーマンを養成している。昨年は一人を連れて働き（戸別）訪問した。今年は皆を色々な所に派遣しようと思っている。そして時には私自身も彼らと一緒に掛けるつもりである」¹⁵と報告している。このようにバイブル・ウーマンのニーズが高まる中、女性宣教師L. ミードは、組織的に養成することを計画し、女子神学校の設立に努めた。「バプテスト女子神学校（The Woman's Baptist Bible Training School）がアメリカ西部バプテスト婦人宣教師協会から認可され、1908年（明治41年）10月15日に大阪南堀江に開設された」¹⁶とある。また校舎には、狭いながらも生徒らが寝泊りできる寄宿舎も建設されていた。その寄宿舎名を「大阪バプテスト・バイブル・ウーマン・ホーム」¹⁷と記されている。

女子神学校は、バイブル・ウーマンの養成校（Training School）として、他の教派においても記述が見られる。1880年（明治13年）に設立された神戸女子神学校（日本組合教会）は、「校舎もなく、校則もなく、さしたる教材もなかった。あったものは、聖書と祈りだけであった。そこには、福音を伝える女性伝道者とならせてくださいという熱心な祈りがあった。・・・だから、アメリカン・ボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions [ABCFM]）はこの学校のことを『女子聖書学校（The Bible School for Women）』と言っていた。同じアメリカン・ボードの宣教師E. タルカットは、女性伝道者のことを“The Bible Women”と呼んだ」¹⁸と記しており、さらに「当時バイブル・ウーマンの養成機関として女性宣教師たちの献身的な働きから設立された神戸女子神学校」¹⁹と記されている。

以上のことから、宣教師側は、日本での宣教をすすめて行く中で、日本人女性の協力が大変重要となり、教派を問わず、日本人女性を教育し、バイブル・ウーマンとの位置付けにて、各地での開拓伝道の先鞭として宣教師が働かせたのである。

〈表〉宣教師によって開設された日本の女子（神）学校（男女共学を除く）

学校名	所在地	教 派	創立年
駿台英和女学校	東京	バプテスト	1875（明治8）年
神戸女子神学校	神戸	日本組合教会	1880（明治13）年
偕成伝道女学校	横浜	日本基督教会	1881（明治14）年
聖經女学校	横浜	日本メソジスト教会	1884（明治17）年
活水女学校神学部	長崎	日本メソジスト教会	1886（明治19）年
横浜英和女学校	横浜	バプテスト	1886（明治19）年

発行年を省略する。）

¹⁵ 大島、『日本に・・・』、pp.46-47。

¹⁶ 大島、前掲書、p.189。

¹⁷ 大島、前掲書、p.244。

¹⁸ 竹中正夫著『ゆくてはるかに一神戸女子神学校物語一』教文館 2002年、p.25。

¹⁹ 竹中、前掲書、p.224。

ランバス記念伝道女学校	神戸	日本メソジスト教会	1888 (明治 21) 年
青葉女学院	仙台	聖公会	1890 (明治 23) 年
美徳女学校	長府	バプテスト	1891 (明治 24) 年
尚綱女学校	仙台	バプテスト	1892 (明治 25) 年
日ノ本女学校	姫路	バプテスト	1893 (明治 26) 年
宮城学院バイブルハウス	仙台	日本基督教会	1897 (明治 30) 年
宮城女学院聖書科 (神学部)	仙台	日本基督教会	1900 (明治 33) 年
福音伝道女学校	東京	福音教会	1904 (明治 37) 年
女子聖書学院神学校	東京	基督教会	1905 (明治 38) 年
東京聖經女学院	東京	基督教会	1907 (明治 40) 年
共立女子神学校	横浜	日本基督教会	1907 (明治 40) 年
東京女子神学専門学校	東京	聖公会	1908 (明治 41) 年
バプテスト女子神学校	大阪	バプテスト	1909 (明治 42) 年
ランバス女学院	大阪	日本メソジスト教会	1921 (大正 10) 年
西南女学院	福岡	バプテスト	1922 (大正 11) 年
日本女子神学校	東京	日本メソジスト教会	1924 (大正 13) 年
青山学院神学部女子部	東京	日本メソジスト教会	1930 (昭和 5) 年
西南学院高等学部 (女子部開設)	福岡	バプテスト	1935 (昭和 10) 年

参照：教立基督研究所『共立研究Ⅶ No.1』2001年8月31日，p.10。枝光泉著『宣教の先駆者たち』ヨルダン社，2001年，「日本バプテスト関係史 (年表)」pp.283-310。

※〈表〉に記した日本の女子 (神) 学校は、バイブル・ウーマンの養成校として設立したと思われるものをリストアップしている (抜け落ちている女学校があることをお断りする)。

1875 (明治 8) 年の〈表〉「駿台英和女学校 (1921 年閉校)」²⁰ は、バプテスト派最初の女学校であり、教育事業の発端を担い、バイブル・ウーマンの養成校として学びがすすめられた。それは完成したばかりのチャペル (東京駿河台鈴木町) にて、数名の少女を集めての家塾から始まったのである。しかし土地建物を提供している日本人が、ここで聖書を正規の教科科目として教えることに反対し、また直接教えていたアーサー宣教師自身の健康がすぐれなかったため、当初の目的とは異なっていく。ただ当時の日本人女性の知識、地位向上のために貢献する一校となる。そのような諸々の事情、時代の変遷により、バイブル・ウーマン養成校から一般校へと代わったもの、または閉校を余儀なくした学校も少なくはなかった。

第二章 バイブル・ウーマンの働きに見えるもの

第一節 献身的な働き

1875年11月6日、東京で最初のバプテスマ式が神田川で執り行われ、バプテスト派最初の女性信者が誕生する。その女性は先に述べた内田ハマであるが、ここでそのバプテスマ式の状況と一牧師の驚きの記述を紹介する。「『駿河台と本郷との間を流れる神田川は、私共の最初のバプテ

²⁰ 宍戸、前掲書、p.23。

ストーリーであった。・・・内田ハマはアルソル氏より沈めを受けた。・・・南側の土手には、私共の数名の女学生が立っており、本郷側の往来には、道を通る多くの群衆が立ち留まって、この奇妙な光景を眺めていた』と書き記し、後年、神戸などで牧師をした吉川亀は『・・・若き婦人が然も西洋人に水に沈めらるるを見るや、在者は西洋人と日本の婦人とが、情死するのだと評する者ありしと言うが、兎に角彼の目には奇怪なりしならん』と述べ、衆人環視の中でバプテスマを受けた内田ハマの勇気と信仰を賞賛している」。²¹ 当時の女性のバプテスマはそれ相応の覚悟を要したであろう。まさにキリストに身を捧げていく決意のように見える。バイブル・ウーマンの働きもそのような決意の基に、一人ひとりの働きが成されていったのであろう。

バイブル・ウーマンの働きは多岐に亘り活動している。先に述べたように、彼女たちの働きは戸別訪問をし、特に日本の女性たちに近づき、信頼関係を勝ち得ることが重要な役割であった。バイブル・ウーマンと呼ばれた彼女たちの条件は、未亡人を含む独身女性に限られた。それは当時の日本社会において女性に対する制約が強かったがゆえに、そうならざるを得なかったのであろう。また宣教師側からすれば、女性既婚者は夫に従うべきであるという聖書の教え（ペトロの手紙一3章）に倣うことで、そのような条件を付けたのではないだろうか。

明治の女性に対する社会の厳しい制約、風潮はいずれにしろ伴ったであろう。しかしその逆の見解に導けることをここに記す。それは、当時の「良妻賢母」などの思想のゆえに、バイブル・ウーマンのような女性が生まれたとも言えるからである。何故なら「良妻賢母とは、たしかに一方では、女性をよき母・妻という性役割に閉じ込める抑圧的な機能を果たしたのであるが、しかし他方では・・・女性の地位を高めるものでもあった。」²² という明治の変遷においてである。バイブル・ウーマンの任命は、その役割ゆえに、女性の自立、誇りを植え付ける結果となったのではないかと考えられる。

バイブル・ウーマンの働きは、宣教師らとの開拓伝道に始まり、教会内の諸々の活動にも取り組んだ。「1895年8月の『グリーンングス』²³に（宣教師）夫人は数週間前にバイブル・ウーマンの一人に依頼されオルガンを持って神戸の東のはずれに住まう信者の家庭での集会に参加・・・30名ばかりの日曜学校を始めていると告げ、バイブル・ウーマンの協力を得た家庭集会や日曜学校の働きについて報告」²⁴している。また「1903年（福岡）、婦人と子どもたちの間で、（宣教師の）妻とバイブル・ウーマンは忠実に働いた。若い女性や婦人たちの間でクラスを持ち、家々を訪問し、毎週三つの日曜学校を指導し、うち二つはウィークデイになされてきた」²⁵と報告している。その働きは教会内に留まらず、地域の子どもたちの育成から、保育園、幼稚園設置への運び、運営。婦人たちの教育、精神的な支援などの社会的な働きも担っていった。

社会的働きをさらに付け加えると、1893年に矢島楯子らが中心になって、「日本基督教婦人矯

²¹ 大島、『日本に・・・』、p.14。

²² 牟田和恵『『良妻賢母』思想の表裏 近代日本の家庭文化とフェミニズム』（『近代日本文化論8 女の文化』）岩波書店、2000年、p.34。

²³ 大島、『灯火を・・・』、p.6。「グリーンングス」とは、1895年から1915年までの日本在住の宣教師間の連絡、活動報告を主とする雑誌。

²⁴ 大島、前掲書、p.90。

²⁵ 枝光泉「バプテスト女性の歩み」（『世の光』日本バプテスト女性連合、2005年5月号）、p.17。

風会」が組織され、禁酒、廃娯、平和などを目的とした運動がなされていくが、そこにもバイブル・ウーマンが加わって健全な社会づくりの働きに貢献している。

さらに、バイブル・ウーマンの具体的事例として、詩人で有名な石川啄木（1886～1912）の日記の中に、宣教師とバイブル・ウーマンが登場する。「明治44年（1911）11月10日・・・午後ミス・サンダーという四十位の女と、これ前来た田部とかいうバイブル・ウーマンとが来た。房州の病院へ行かないかということをお勧めするためだった。そうしてミス・サンダーはこなれない日本語で熱心に基督教を説いた」とあり、その後、啄木が病院へ行ったかは記されていないが、翌年には彼の生涯を終えている。

この日記には、貴重な2つのことを示唆しているように思う。1つは、バイブル・ウーマンが宣教師と共に戸別訪問をしていたという事実と、もう1つは、バイブル・ウーマン自らが、バイブル・ウーマンであることを名乗り、誇りをもって働いている姿を思い浮かばせてくれているからである。

このように、バイブル・ウーマンは至る所で活躍する中、彼女たちへのニーズは高まるばかりである。メドリング宣教師からは人材不足の声が記されている。「1919年（鹿児島）、有能なバイブル・ウーマンが欲しい。日曜学校教師二人と幼稚園教師一人も欲しい。他派は二人から五人のバイブル・ウーマンがいる。県の色々な地域に多くのバイブル・ウーマンがいる。そのトレーニング・スクールを彼らは持っているが、我々の必要には応える予定がない」²⁶と、宣教において如何にバイブル・ウーマンが必要とされているかが伺える。

但し、バイブル・ウーマンについてももう一つの一面を記さなければならない。それは彼女たちが置かれているところは、教会ではなく、あくまでもその雇い主である宣教師個人の支配下にあったということである。そのため、宣教師の身の回りの世話など、「お手伝いさん（maid）」的働きもこなしていたのであった。

第二節 バイブル・ウーマンの光と影

バイブル・ウーマンの働きは、限られた資料の中から言い切ることは難しいことだが、少なくとも宣教師からの報告によると、日本の宣教において欠かせない存在であったのは確かなようである。「1904年（小倉）、妻の助手（バイブル・ウーマンの別名で『日本人の助手』という言い方があった）が、七月に亡くなった。しばらくその痛手が大きかった。その助手は妻と共に忠実に働いたので、彼女のことは長く我々の心の中に残り続けるだろう」²⁷と高く評価している。しかし、勿論そのような光の部分だけではない。

当時の女性が職に付くことは厳しい時代であったであろう。その中で宣教師に雇われるということは、未亡人を含む独身の女性たちにとって有り難い事であったと思われる。ただその支給される報酬は非常に安価なものであった。

1906（明治39）年の『ジャパン・アニュアル（Japan Annual）』には当時のバプテストのバイブル・ウーマンに関する概要が報告されている。それによれば、バイブル・ウーマンは全部で19名。40歳以上4名。30～39歳3名。それ以外は30歳未満。バプテスト派の学校の卒業生7名。

²⁶ 枝光、前掲書、p.17。

²⁷ 枝光、前掲書、p.15。

その他のミッションスクールの卒業生2名。勤続20年以上3名。10年1名。7年1名。その他は2～4年。給料（月額）は8～12円。8円以下若干名²⁸・・・等と記されている。給料に関しては、神戸女子神学校のミッション財的援助（appropriation）表の1899（明治32）年に、「バイブル・ウーマンの報酬月8円」²⁹と記されており、教派の違い、7年間の開きはあるが殆ど変わらない。

当時の8～12円という金額は現在に換算するとどの程度の価値があるのだろうか。日本メソジスト教会の明治の牧師支給に関する資料³⁰には、「（1902年）牧師の標準給料は年額420円（月額35円）」とある（実際にはそこまで満たされていない場合が多いと記される）。また1888年から1902年の牧師支給額を見ると、約25円から35円とされている。その決して高いとは言えない牧師給に対して、バイブル・ウーマンの給料は約3分の1以下ということになる。先程の『ジャパン・アニュアル』の報告書は、バプテストのミッションスクールの数や生徒数の割には、バイブル・ウーマンが少ないことを指摘し、残念だとしているが、同時に、その原因が給料の低さにあることも示唆している。「“Japan Annual. 1906. pp.56-57.”・・・しかし、バイブル・ウーマンとして受け取る額の二倍または、それ以上の給料を払う女性の仕事があることを考えれば・・・、その数が少ないのは理解できよう」³¹とあり、バイブル・ウーマンが如何に安価な給料で働いていたかが分かり、また同時に、如何に献身的に仕えていたかということが知り得る。

ただバイブル・ウーマンは、宣教師と寝食を共にしていたため、宿泊費、食費、光熱費は宣教師側が負担していたと考えられる。しかしそれにしても給料が適当とはいえないであろう。

ちなみに、そのころ来日していた宣教師の給料はどのくらいであったのだろうか。「1888年・・・イビー（メソジスト教会宣教師43歳）など宣教師（五人）の年棒1250円（月額104円）、それに子女手当や教師手当等がついて、イビーの場合2135円（月額178円）であった」³²とある。この格差をどう見るか。面白いことに、バイブル・ウーマンの月給の3倍以上が日本人牧師の月給にあたり、また日本人牧師の月給の3倍以上が宣教師の月給となっているのは偶然であろうか？

なお、予想以上に高額と思われる宣教師の年棒額も、政府雇いの外国人の年棒に比べれば格段に低かったことは追記しておく。³³

次に前節でも触れたが、バイブル・ウーマンは教会に属していたのではなく、宣教師の雇われ人であった。そのため、宣教師が移動や帰国になると、教会に属さない彼女たちは、そこに取り残され、職を失うことにもなった。彼女たちが教会に属さないのは、教会側が雇えない財政的な問題もあったと言われる。「南部バプテストによる日本の強勢報告」³⁴によると、明治から昭和

²⁸ 宍戸、前掲書、p.183より参照。

²⁹ 竹中、前掲書、p.245。

³⁰ 森岡清美著『明治キリスト教会形成の社会史』東京大学出版会、2005年、p.274, p.315より参照。

³¹ 宍戸、前掲書、p.185。

³² 森岡、前掲書、p.315。

³³ 森岡、前掲書、pp.315-316。

³⁴ 枝光、『宣教の・・・』、pp.277-278。

初期（1890～1940）にかけて自給出来た教会は、大正元年（1912）に1教会で（大正4年には途絶え再び7年後に2教会となる）、昭和15年（1940）においても5教会に留まっている（教派を問わず、米国などの宣教師から半分前後の支援金によって成り立っていた）。牧師を支えるだけでも精一杯であるところに、彼女たちを抱えることなど非現実的ということか。

1908年に開校した大阪のバプテスト女子神学校は、1936年に閉校している。〈表〉に掲げた女学校の教員も後に閉校を余儀なくしているが、それも「時代の変遷によって」³⁵と理由付けられている。勿論、学校を運営する中で経済的なこと、時代の変遷により状況は変わらざるを得ないのであろう。しかし、ただ単にそれだけを理由としてはいけないように思う。バイブル・ウーマンと男性らとの給料の格差、バイブル・ウーマンの「御役御免」のあり方など、やはりそこには、女性に対する差別が背後にあり、男尊女卑から来る弱者の切り捨てのように見える。教会もその中であつたことを認めなければならないであろう。

第三章 その他、戦後のバイブル・ウーマンを追う

第一節 戦後のバイブル・ウーマンと思われる方々を尋ねて

私はこの度、以前女性宣教師のパートナーとして寝食を共にし、伝道に携わった三人の女性方にお会いし、お話を伺った。それぞれの話を要約し以下に紹介する。

<2006年9月14、16日、札幌バプテスト教会・宣教師館にて>

そのお一人、札幌バプテスト教会の野村宏子氏は、1952年秋から南部バプテストのアーニー・フーバー宣教師と共に北海道の開拓伝道に携わった。野村氏の役割は宣教師の日本語指導の助手としての働きであった。いわゆる「ティーチャー/ヘルパー（“teacher/helper” 教師/助手）」と呼ばれるものである。ただ野村氏の働きは、その日本語指導の助手（フーバー宣教師とは通訳者としての働きを成す）としての働きのみならず、チラシ配布、戸別訪問、集会での奏楽、讃美（聖歌隊）指導、教会学校教師などあらゆる伝道の働きに関わった。またフーバー宣教師と共に生活し、身の回りのお世話もこなしていった。以前（53年頃）、北海道にいる野村氏に対して、親戚からお見合い話があり、家に帰って来なさいとの事であったが、ここでの生活が楽しくてその話を断ったという。そんな野村氏も、1955年か58年頃、今の働きをこのまま続けるべきかどうか大変悩んだとのこと。これからの歩みをどうすべきか主に祈っていた頃、大谷賢二牧師が家を訪ねてくださり、そのことを打ち明けると、・・2月の真冬、雪の積もる中を、フーバー宣教師と3人で、札幌教会の礼拝堂に入り、講壇の前で、大谷牧師が野村氏に手を置いて祈ってくださった。その時、野村氏は、この身を主に委ねて、ティーチャー/ヘルパーとして献身する決意をしたという。その後、フーバー宣教師と共に、札幌から、小樽、旭川、函館、釧路など、次々に開拓伝道に携わった。そして2005年にフーバー宣教師が召天されるまでの52年余を、ティーチャー/ヘルパー

³⁵ 大島、『日本に・・』、p.250。

として仕えたのである。

ちなみにティーチャー/ヘルパーとしての報酬は宣教団側から受けていたが、非常に安価なものだった。最初に契約した金額が昇給もなくそのまま続いていたとのこと。

<2006年9月24日、西南学院バプテスト教会にて>

次に、現在西南学院バプテスト教会の（旧姓：調）山田節子氏は、以前、「宣教師ヘルパー」として働いていた。1952年6月、節子氏が大牟田教会付属幼稚園の教師をしていた頃、日本バプテスト連盟の「全日本にキリストの光を」のスローガンのもと、エリザベス・ワトキンス宣教師が四国松山へ派遣される際、節子氏が「宣教師ヘルパー」としてお供することになった。節子氏の働きは、開拓伝道ゆえの地道なチラシ配布、戸別訪問、集会などの援助、教会学校の教師などを務めた。またワトキンス宣教師と共同生活を行っていたため、身の回りのお世話もこなした。ちなみにワトキンス宣教師は日本語が上手なため、日本語指導は必要としなかった。その後節子氏は、山田豊秋と結婚することになり、2年余の「宣教師ヘルパー」の働きを終えている。

ワトキンス宣教師は、自らの伝道記録の中で節子氏を紹介するとき“My helper, Miss Setsuko Shirabe”³⁶と記している。

<2006年11月5日、田隈バプテスト教会にて>

三人目は、田隈バプテスト教会の（旧姓：松山）野田栄子氏である。1956年頃、大阪にある家庭集会から始まった福音派の教会にてバプテスマを受けた。それからすぐに、ジュエルプライス女性宣教師のお手伝いをするようになった。栄子氏の働きは、常に手持ち袋に手作りのトラクトを入れ、ほぼ毎日配り歩き、毎週土曜日には路傍伝道を神学生5～6人が加わって一緒に証しなどをした。各集会の援助、教会学校の教師も務めた。教会には女性神学生3～4名と男性神学生1名が寝食を共にし、栄子氏は自ら率先して彼らの食事作り、買出し、掃除などのお世話をした。彼らが学ぶことに集中出来るためにであった。栄子氏も合間を見て学んだという。教会の人々や宣教師からは「教会ママ」と呼ばれ、慕われたという。ただそういう栄子氏ではあったが、宣教師が突然帰国すると、何か取り残された気持ちになった。変わりの宣教師が来日するが、その宣教師とは意見が合わず、躓いてしまったという。栄子氏はその時のことを振り返り、あの頃は働きすぎて、疲れていたかもしれない、鬱気味だったかも・・・と話す。他の教会の宣教師から「私のメイドをしないか」と誘われたが断ったという。その後結婚し、4年余の働きを終えた。ちなみに、報酬は直接宣教師から2000円を貰っていた。余りにも安いと、時々教会員の方から献金を頂くこともあったという。

以上、女性宣教師のパートナーとしての働きをされた三人の方々に話を伺った。この三人のお話には、それぞれ共通点もあり、また違いもあるが、バイブル・ウーマンの働きと照らし合わせると、非常に似通っている。まず、宣教師と共に伝道に携わり、多種多様な働きをした。同時に身の回りのお世話もこなした。また独身女性であり、生涯尽くす場合と結婚と同時に働きを終える場合とがある。さらに報酬は宣教団、もしくは宣教師から受け取り、非常に安価なものであつ

³⁶ 松山バプテスト教会50年誌編集委員会『喜び・祈り・感謝！1952～2005』2005年、p.125。

た。栄子氏の場合、戦後としては特例かも知れないが、突然宣教師が帰国し、取り残されるという不運な経験をしている。このことから、非常にバイブル・ウーマンの歩みと働きに似通っており、この三人の方々は戦後のバイブル・ウーマンと言えるのではないだろうか。

三氏の方々には、ご無理を言って貴重な時間を割いて戴き、また過去の出来事について色々伺い大変失礼した。しかし、この若輩者に、三氏共々快く親切にお話くださり、改めて感謝を申し上げます。「ありがとうございました」。

第二節 バイブル・ウーマンについてF. C. パーカー氏とのQ&A

F. C. パーカー氏³⁷とのQ&Aは、拙論の件でL. K. シート師とG. W. バークレー師より紹介を受け、2006年10月14日から約二ヶ月間に渡り、電子メールにてやり取りしたものである。このQ&Aは、論文資料の引用という形のみでの記載も可能だが、今後の貴重な資料に成りえるのでほぼそのままの文書で記す。またその内容は、「戦後のバイブル・ウーマン」に限らず、戦前または海外での状況にも触れている。

親愛なるタケヒロへ：

バイブル・ウーマンについてのあなたの質問に答える前に、他の押し迫った仕事を済ませるまで待っていただいてありがとうございます。(省略)あなたの言いたい主題を読み(事前に要約論文を送る)、日本における、特に、バプテストの間でのバイブル・ウーマンの取り扱いに感銘を受けました。残念なことです、多くの宣教師たちは彼らのバイブル・ウーマンの名前を報告していないという失敗をしてしまいました。彼らは多分、彼らの支援者たちに送られる手紙や報告書に見知らぬ名前を書くことに躊躇しただけでなく、人種差別と性別の偏見に影響されていました。彼らの幾人かは、必ずしもフルネームではありませんが、名前を報告しました。ルシア・クラークはしばしば彼女のバイブル・ウーマンについて書き、彼女を小林さんという名で呼んでいます。エリザベス・ワトキンスは彼女のヘルパーたちを、調節子と津田ふさ子の名を知らせています。彼らはバイブル・ウーマンとして働きました。しかし、エリザベスは彼らをヘルパーと呼んでいます。津田ふさ子はほんの短い間彼女と働きました。

私はクララ・サンズの攻撃的な仕方と A. A. バネットの反対意見についてのあなたの言及を面白く読みました。³⁸ 私はジョナサン・ゴープルも又、サンズさんにやきもきして、彼女が彼自身の生徒の幾人かを勧誘して(盗んで)いったと非難していることを思い出しました。

さて、あなたの質問に対して、

³⁷ フランクリン・カルヴィン・パーカー (F. Calvin Parker) 氏は、1926年フロリダのアポッカで生まれた。カールソン・ニューマン単科大学を卒業後、サウスウエスタンバプテスト神学院に入学神学士を修得、サザンバプテスト神学院で神学修士。1951-89年まで南部バプテスト連盟宣教師として日本で働く。働きは多様で、伝道者、宣教団財務、研究考案コンサルタント、牧師、神学校教師など。最後は西南学院大学神学部で教えていた。現在アメリカ在住。

³⁸ 拙論の **おわりに** の第一節 10行目からの記述。

Q&A

問① バイブル・ウーマンについて何かご存知の点がありましたらお教えてください。

(答え) バイブル・ウーマンは、伝道者として、聖書行商人 (colporteurs) として、ソーシャルワーカーとして、そして宣教師の助手として仕える土着の信徒の働き人のことです。ある者たちは彼らの奉仕に対して金銭を支払われ、他の人たちは自活のボランティアです。中国において南部バプテストの宣教師ロティ・ムーンはキャンという名の一人のバイブル・ウーマンと一緒に働きましたが、彼女は中国教会の宣教協会によって財政支援を受けていました。

私の知る限りでは、最初にこの用語を使った人は、エレン・ランヤードで、彼女は 1857 年、ロンドンに聖書国内女性宣教団を設立した人です。彼女は、その町の最貧の人々の間で宣教師としてソーシャルワーカーとして働くバイブル・ウーマンを訓練しました。各自は 3 ヶ月にわたって、法律と衛生学と聖書の訓練を受けました。

ランヤードはバイブル・ウーマンたちを、彼らが良く知っている地域である彼ら自身の近隣で働くように任命しました。彼らは聖書を売り、妻たちや母親たちに家事的なアドバイスを与えました。彼らは料理、掃除そして他の家事仕事に関する助言を提供したのです。

ランヤードの目的は、貧しい女性たちに伝道し、彼らを社会の責任ある、自己を尊重する人間たちにすることでした。彼女のバイブル・ウーマンたちは、ローマ・カトリックを除くあらゆる教派の人たちと一緒に働きました。

1867 年頃には、ロンドンに 234 名のバイブル・ウーマンがいました。宣教師たちはランヤードの用語と彼女の考えの幾つかを採用し、それらを世界中で応用したのです。1890 年代に、ロンドンでは定期刊行物があり、「教会宣教協会との協力で女性と子どもたちに伝道するための中国バイブル・ウーマン宣教団」によって財团的に支援されていました。

あなたの論文の中で、日本でのバイブル・ウーマンは性別の偏見から「伝道者」とは呼ばれていなかったと言っています。私は同意見です。多分、ある宣教師たちは、「バイブル・ウーマン」という言葉がより広く理解されるようになっていたので、「伝道者」よりも「バイブル・ウーマン」の方をより好んだのでした。

問② 日本以外の如何なる国でバイブル・ウーマンは活動していたのですか？

(答え) 彼らは世界中の国々で、特に、アジア、アフリカ、そして太平洋諸島で活動しています。例えば、19 世紀のバプテストの宣教師であるアデル・フィールデは一人で中国人 500 名のバイブル・ウーマンを訓練しました。エリザ・アグニューはセイロンで (今はスリランカですが)、数百人のバイブル・ウーマンを訓練していました。1950 年代にはケニアの長老派はバイブル・ウーマンあるいは教区姉妹 (parish sisters) と呼ばれた女性たちを訓練していました。最近 1970 年に、南インドの B. V. サバンマは、その教会には 215 名のバイブル・ウーマンがいたと報告しています。私は多くの国の宣教師たちからの手紙でバイブル・ウーマンへの言及するのを見てきました。

問③ バイブル・ウーマンの働きの本質は何ですか？

(答え) あなたが日本におけるバイブル・ウーマンの働きについて書いたことは一般的にも適用

しています。

中国人の間では、あるバイブル・ウーマンは「女性説教者」でした。アデル・フィールドは、彼女のバイブル・ウーマンに福音の科目を教え、彼らを二人ずつ村人にその科目を教えるために派遣しました。ある時が来ると、彼女は彼女の働き人を再び集め、彼らにもう一つ他の科目を教え、そして彼らを再び派遣したのでしょうか。

これらの女性たちは、ただ単に、一般的伝道者としてだけ働いたのではなく、ロンドンにおけると同様、聖書の行商人として、そしてソーシャルワーカーとして働きました。通常彼らの職務は排他的に女性と子どもたちに限られていました。彼らは時に、男性たちが直接女性たちと行動しないような文化においては効果的でした。

問④ バイブル・ウーマンは今日でも活躍していますか？

(答え) はい。合同メソジスト教会の女性部門は 2003 年に、この用語を活用させ、それ以来、多くの国でバイブル・ウーマンを訓練しています。それらには、アンゴラ、ラオス、インド、カンボジア、フィジー、サモア、トンガ、ソロモン諸島、韓国、フィリピン、そしてマレーシアを含んでいます。最近マレーシアで、85 名の新しいキリスト者がバイブル・ウーマンによる働きの結果として洗礼を受けました。バイブル・ウーマンたちは特に、家庭内暴力とかエイズのような問題に聖書の教えを適用させるように訓練されてきました。

さらに加えると、彼らは中国で活躍しています。バイブル・ウーマンのための中国宣教と呼ばれるウェブサイトがありまして、それには、写真や現在の彼らの働きについての物語が載っています。

問⑤ バイブル・ウーマンの使用は、アメリカの宣教師たちの伝道戦略の一部でしたか？

(答え) はい。多くの宣教師は英国のヘンリー・ヴェンと合衆国のルース・アンダーソンによって提唱された戦略を採用しました。彼らは、自給し、自立し、自分で伝道できるという教会の成長を促進することを目指したのです。この目的のために彼らはあらゆる種類の土着の働き人を集め、訓練し、そして雇用しました。女性宣教師たちは、彼らが訓練し指導したバイブル・ウーマンを通して彼らの働きの実を大きくしようとしたのです。より初期の時には、彼らはこの訓練を個人として行いました。やがて、彼らはバイブル・ウーマンを訓練するために学校を始めました。1900 年に、世界中の種々の訓練校では、3513 名の女性たちが履修登録していました。

問⑥ 戦後の日本においては「教師の手伝い (teacher's help)」を除いて、バイブル・ウーマンへの言及がないように見えます。「教師の手伝い」とは何を意味するのですか？それはバイブル・ウーマンの別名でしょうか？

(答え) 「ジャパン・ハーヴェスト」(福音系の雑誌?) の 1958 年夏の号に「バイブル・ウーマン」という一つの論文があります。著者はフローレンス・カールソンで、チーム宣教師でした。彼女は荻野とみ子と一緒にした仕事を書いています。彼女は荻野をバイブル・ウーマンと呼んでいます。二人は一緒に住み、費用の大半をフローレンスが出しています。とみ子は日本語をフローレンスに教え、フローレンスはとみ子に聖書を教えています。彼らは一緒に日曜学校を行い、病院訪問、家庭訪問、そして個人伝道をしています。これは私が気付いている戦後で唯一のバイブル・ウーマンへの言及です。しかし、ほかにあるかも知れません。

私は“teacher’s help”（教師の手伝い）という用語に馴染みがありません。たぶんそれは“teacher’s helper”（教師の助手）、あるいは“teacher/helper”（教師/助手）の間違いかも知れません。私の宣教師初期の時代に、私は宣教師によって準備された予算でフルタイムの“teacher/helper”を雇いました。彼女は説教の準備、日本語の手書き、そして金沢におけるキリスト教の歴史の研究で私を助けてくれました。彼女は私の家で行っていた日曜学校のクラスを教えてもいました。

多くの他の宣教師たちも私がしたようにしました。南部バプテスト宣教師は、“teacher/helper”の雇用に関して、フルタイムであれ、パートタイムであれ、詳細な政策を持っていました。その政策は、サラリー、ボーナス、退職手当、退職システム、輸送、賃貸手当て、そして付加訓練のような項目をカバーしていました。あらゆる場合に、契約書が要求されました。

バイブル・ウーマンが戦後、日本で殆ど用いられなくなった一つの理由は、たぶん、女性を牧師と伝道者として受け入れるようになったことがあるでしょう。（省略）

問⑦ Parker 先生が以前書かれた“The Southern Baptist Mission in Japan, 1889-1989”の中で、バイブル・ウーマンに言及していないように思いますが、それは何故ですか？

（答え）私が『日本における南部バプテスト宣教 100 年史』においてバイブル・ウーマンに言及していないのは事実です。彼らは、私が調べた手紙や資料に殆ど登場しておりませんでしたので、この主題は重要であるように思えなかったのです。バイブル・ウーマンは、アメリカン（北部）・バプテストの宣教師たちと共にもっと顕著な役割を演じたのでした。彼らは 19 世紀後半と 20 世紀初期には南部バプテストたちより早く到着していたし、人数も多かったのです。

問⑧ 私は先月（2006 年 9 月）、札幌バプテスト教会の野村宏子氏にお会いしました。彼女は 1952 年から北海道の開拓伝道を、A. フーバー宣教師の“teacher/helper”として共に働かれました。その彼女の働きはまさに、バイブル・ウーマンの働きのように思えるのですが？

また私は、西南学院バプテスト教会の（旧姓：調）山田節子氏とお会いしました。彼女は 1952 年から 2 年余り、四国の松山で E. T. ワトキンス宣教師と共に開拓伝道をされています。ワトキンス宣教師の報告書の中で、“My helper, Miss Setsuko Shirabe”とあり、当時の松山教会での肩書きは「宣教師ヘルパー」でした。いわゆるバイブル・ウーマンのことなのでしょうか？

（答え）あなたが野村宏子さんにお会いしたことを嬉しく思います。彼女は、神戸において、今田家の働き人として働いている時に回心し、以後素晴らしい人生を送ってきました。多くの他のバイブル・ウーマンと同じように、彼女は一人の独身の宣教師と一緒に住み、大きく広がるキリスト教的諸活動において彼女のパートナーとして働きました。そうですね、彼女は「助手(helper)」あるいは、「教師/助手(teacher/helper)」と呼ばれていましたが、より初期の時代から、野村さんはバイブル・ウーマンと呼ばれてきたらうと私は思います。

あなたはまた、調節子さんに言及しています。私は以前の私の手紙の中で彼女に言及しましたね。そうです。彼女はより以前にはバイブル・ウーマンと呼ばれてきたらうと私は思います。この用語はキリスト教的働きに彼女自身を捧げた殆どすべての彼女について用いられました。バ

イブル・ウーマンはより低い階級とより高い階級の両方からやってきました。ある人たちは貧しく、他の人たちは恵まれていました。彼らのタレント（賜物）は広く多様性がありました。

より初期の時代には、宣教師たちは支配的であり、かつパトロンの（patronizing）でした。通常彼らは土着の牧師たちに対してと同様にバイブル・ウーマンに対しても統制力を持っていました。宣教地（伝道所）では、階層制（hierarchy）が存在し、バイブル・ウーマンたちは牧師たち、学校の教諭たち、看護師たち、その他の下位に位置する最も下の位置づけのスタッフでした。もっと最近では土着の指導者たちは支配的になってきましたし、彼女たちも彼らに対する多くの差別から自由にさせられてきています。彼らは今や、牧師として、そして伝道師として奉仕しています。そして宣教師たちによって雇われている人たちは一般的に「助手（helper）」、あるいは「教師/助手（teacher/helper）」と呼ばれています。

ですから、バイブル・ウーマンという用語が多くでカンバックしてきたことは注目に値することであると思います。

もしさらに質問があれば、私はその質問に答えようと思います。

＜真実をもって、カルヴィン・パーカー＞

以上が、F. C. パーカー氏とのQ&Aである。

※ G. W. バークレー師によると、問⑥の答えに出てくる、“teacher/helper”の用語は、1981年（頃）以降からは、その用語は用いられていない。宣教師として来日した頃は、宣教団から雇われた日本語指導者を紹介され、日本人に対する日本語説教、講義、祈祷などの原稿のチェック、発音のチェックなどの指導を受けた。その人たちのことを報告書の中で“language assistant”もしくは、“language helper”「言語の助手」と記している。

一つの逸話だが、バークレー師によると、“teacher/helper”を勤めるのは女性が多かったため、男性宣教師の日本語指導もよく女性が勤めた。そのためか、ある男性宣教師の日本語が女性ばかりだったと言う話である！

第三節 アジアにおけるバイブル・ウーマンの働きを追う

拙論のテーマは、「日本宣教における」バイブル・ウーマンについてと限っているが、この節では日本以外のバイブル・ウーマンの働きを見ることにより、多少とも「バイブル・ウーマンとは何か」について深まると考える。少ない資料（拙論の第三章、第二節「F. C. パーカー氏とのQ&A」と参考文献の「バイブル・ウーマンに関する英語資料」）からではあるが、そこから見えることについて述べる。

「バイブル・ウーマン」という用語を最初に使ったと思われる人は、イギリスのエレン・ランヤードである。彼女は、1857年ロンドンにおいて、聖書国内女性宣教団を設立し、宣教師としてソーシャルワーカーとして、最も貧しい人々の間で働くバイブル・ウーマンを訓練している。各自は3ヶ月にわたって、法律と衛生学と聖書の訓練を受け、「彼らが良く知っている地域で・・・近

隣で働くように任命・・彼らは聖書を売り、妻たちや母親たちに家事的なアドバイスを与え・・。彼らは料理、掃除そして他の家事仕事に関する助言を提供した・・。ランヤードの目的は、貧しい女性たちに伝道し・・社会の責任ある、自己を尊重する人間たちにすること」³⁹であった。そのことからすると、当初のバイブル・ウーマンは、宣教師の助手というよりも、自立した存在として教育され、地域に出て働いていたことが分かる。女性たちの手で、女性の社会的地位、知識向上を目指している。1867年頃には、ロンドンに234名のバイブル・ウーマンがいたとされる。

その後の宣教師たちは、ランヤードの用いた方法を幾らか真似て、それらを世界中で応用したようである。その国々は、特にアジア、アフリカ、そして太平洋諸島で多く活動している。例えば、アメリカン・バプテストの報告書によると、1886年に東中国宣教団の教会数は、7つ、会員246名、中国人説教者は13名、バイブル・ウーマンは4名、学校は6つ、生徒は184名であったとある。また既に、1873年には中国に赴いていた南部バプテストの宣教師ロティ・ムーンがおり、キャンという名のバイブル・ウーマンと一緒に働いたとある。

1896年の南部バプテストの報告書には、同じく中国において、その年「404名の受浸者から見られるだけではなく、・・諸教会の幾つかの真のリヴァイバルを喜んだ・・伝道者たちとバイブル・ウーマンたちが滅び行く者の救済のための義務の重荷を負っており、多くの新しい場所で御言葉を説教している」⁴⁰とあり、バイブル・ウーマンも説教者としての働きを担っていたようである。

そのような働きの中で、一つの疑問視すべき記述がある。同報告書の中に、「・・我々の最も忠実な働き人の一人が秋コレラに罹り、彼女の報酬を返却した。幸いにも、ライチョフにある訓練校で学んでいる7名の学生の一人がこの学期にコースを修了し、すぐにバイブル・ウーマンとして仕事を始めることができる」⁴¹とあり、ここでのバイブル・ウーマンは、何かモノのようなあつかいに感じ取れる。コレラに罹って働けなくなると報酬を返却し、別のバイブル・ウーマンで補い、そのことを「幸い」として報告している。確かに、伝道優先、報告書ゆえの冷たさ（業務的）はあるかも知れないが、それにしても働けなくなると報酬を返却するというのは、労働条件が悪すぎるし、使い捨てのように思われる。

次に、最近では1970年の報告書があり、南インドのB. V. サバンマは、215名のバイブル・ウーマンがいることを報告している。この情報を提供したパーカー氏は、「私は多くの国の宣教師たちからの手紙でバイブル・ウーマンへの言及するのを見てきました」⁴²と述べている。アジアにおいては今なおその形を留めて、バイブル・ウーマンが活動している国もあるようである。

以上のことから、バイブル・ウーマンをアジアの歴史において見る中で、彼女たちが用いられ、活動する条件が見えてくる。それはいずれも、国、地域の貧困層において、宣教地の土着の独身女性が用いられるということである。その目的は、伝道は勿論であるが、女性の社会的地位の向上を目指す事も含まれていると言える。またバイブル・ウーマンは、ここでもやはり、固有名詞で記されている報告書は殆ど無く、そのバイブル・ウーマンがどこの誰なのかは知ることは出来

³⁹ 拙論の第三章、第二節「バイブル・ウーマンについて F.C.パーカー氏との Q&A」問①より。

⁴⁰ 拙論の参考文献、「バイブル・ウーマンに関する英語資料から」15頁より。パーカー氏も「中国人の間では、あるバイブル・ウーマンは『女性説教者』でした」と問③で記している。

⁴¹ 拙論の参考文献、前掲書、18頁の **女性の働き** より。

⁴² 拙論の第三章、第二節「バイブル・ウーマンについて F.C.パーカー氏との Q&A」問②より。

ないでいる。

結 論

「バイブル・ウーマン」とは何だったのか<考察>

バイブル・ウーマンは日本宣教において、欠かすことの出来ない存在であったことはこれまでの各章にて記した。しかし、ここで一つの疑問が浮かび上がる。それは、何故、宣教師側は彼女たちを「バイブル・ウーマン」と呼んだのであろうか。彼女たちは、献身をし（献身をしたという記述は見られないが、彼女たちの献身的な働きからそう判断する）、女子神学校、または宣教師から直接トレーニングを受けた伝道師ではなかったか。であるならば、“Bible Woman”と呼ばずに、本来なら“Evangelist”と呼ばれるべきではなかったか。実際に拙論の第1章―第2節で「アメリカン・ボードの宣教師E. タルカットは、女性伝道者のことを『バイブル・ウーマン』と呼んだ」との記述があるように、「バイブル・ウーマン」は、「女性伝道師」であることを認めている。では何故、宣教師側は、報告書の中で「伝道師」を用いずに、「バイブル・ウーマン」の名称を用いたのか。この事について、一つの宣教師側の手紙を基に推測したい。それは、日本で活躍した女性宣教師C. A. サンズ（第一期 1875～1886年滞在）に対する聖書学者A. A. ベンネット博士の批判からである。「彼女の積極的な活動が本来的には男子宣教師の活動の領域を侵すことになったと、聖書的な立場から注意を促したものであった。・・・『ミス・サンズは自分自身をブラウン博士と全く同じ宣教師だと考えており、誰にも従属していないとしている。・・・男性の仕事は男子によって一番よく果される。（著者註：テモテへの手紙―2章11～14節などには男の仕事と女子の仕事の区別が言及されている）・・・今後、婦人を男子の仕事の為に派遣すべきではないと言う了解を得る為に何らかの手を打って欲しい』」⁴³云々である。このことから宣教師側に既にあるような男女の優劣から、自ずと日本人女性と女性宣教師との間に格差を付けて、報告書の中に違いを見せるのは優に想像がつく。まして自らの身の回りの世話もさせているのだから、“Evangelist”と呼ぶわけにはいかないのであろう。そこで“Bible Woman”という用語を用いたのではないかと推測する。そのことについて（電子メールで質問したところ）、F. C. パーカー氏は「残念なことです、（当時の）多くの宣教師たちは・・・人種差別と性別の偏見に影響されていました。・・・宣教地では階層性（hierarchy）が存在」していたことを述べている。

次に「バイブル・ウーマン」という一つの代名詞で彼女たちを言い現し、固有名詞を殆ど用いなかったのはどう理解すればよいのだろうか。それはバイブル・ウーマンが、宣教師たちにとって、「同労者」なのか、それとも「労務者」だったのかで大きく異なる。勿論、同労者として共に開拓伝道に携わったものと記述も見られるため、そうであったと思う。しかし、報告書の中に固有名詞での記述が少ないところに、「労務者」的要素が見え隠れしているようではない。共に働いた同労者であれば、固有名詞を記し、友を高らかに賞賛するのではないだろうか。そうではな

⁴³ 大島、前掲書、pp.41-42。

く、「バイブル・ウーマン」という代名詞で彼女たちを一つまとめて現しているところに、「労務者」的扱いに見えてくる。

そのような報告書の中の輝かしい功績はどこに向けられるだろうか。それは自ずと、労務者の雇い主である宣教師へ、多くの賞賛が流れていくのではないだろうか。

おわりに

今後の課題

日本の宣教は、宣教師たちの献身的な働きなしにはあり得なかった。それに対する感謝と賞賛はこれからも成されるであろう。またその歴史を振り返り、開拓伝道のスピリットを学び、語り継がれて行くものであろう。それと同時に、共に働いた「バイブル・ウーマン」と呼ばれた彼女たちの働きも同等に感謝され、賞賛されていかなければならないと強く感じてならない。しかし、残念な事にその彼女たちの名前や出身地、その働きの内容をすべて知ることは出来ないのである。それは彼女たちが、教会に属さなかった事、宣教師側の報告書に固有名詞が記されていない事が原因だった。その原因の根本には、「人種と性別の偏見」がもたらす差別の結果といえる。その過去の事実を見出した時、我々は悔改め、その事実と向き合いながら、その問題を教訓とし、現在と未来に語り継がなければならないであろう。

以上の論述を進める中で、バイブル・ウーマンについての更なる展開が見えてくる。例えば、男性版のバイブル・ウーマンはいなかったのか？ または、日本人牧師はバイブル・ウーマンのような助手を用いなかったのか？ 海外の日本人宣教師はどうか？ あるいは、今でも南部バプテストは女性への差別、偏見が見られるが、それが本当に聖書的なのか？ さらに、日本バプテスト連盟が1955年に沖縄伝道の実施を決議し、「国外伝道」⁴⁴と位置付けした問題についても、宣教論の視点から展開してみたいという興味もある。そのような更なる展開も見られるであろうが、今後の課題とさせて頂きたい。

最後に、明治、大正、昭和と女性にとって常に不利な時代の中であって、キリストへの献身を決意し、宣教のために歩まれた、名も知れない“Bible Women”と呼ばれた“Evangelist”の女性たちに心から感謝を捧げたい。

⁴⁴ 日本バプテスト連盟 50年史編纂委員会『日本バプテスト連盟 50年史』1997年、pp.63-65。

参考文献

バイブル・ウーマンに関する英語資料から

1) Japan Mission, 1847-1905 Dallas, Texas. SBC.

「日本伝道 1847 (弘化 4 年) - 1905 (明治 38 年)」

AN 2674 1894 (明治 24) 年 5 月 11 日 ダラス テキサス SBC.

福岡 門司 J.W.マッコラムからの報告

19 頁. 主要な伝道地点と外部伝道地点

「主要伝道地点」とは、そこで在留する宣教師が存在する地点を意味している。これについて 2 つのことを報告する。報告した伝道地点の内に 4 つについて、我々はチャペルを借り、規則的な礼拝 (集会) を持っている。毎月、通常 6 回より多い場合には、10 回から 15 回の集会である。我々の伝道者たちはこれらの外部伝道地点に住んでいる。我々、つまり、ワーン氏と私はこれらの伝道地点を実行可能な限りしばしば訪問し、正規の伝道地点と近隣の村で可能であればどこでもその伝道者たちと共に礼拝を持っている。我々の語学の教師たちは両方とも我々の教会の会員であり、私的にも公的にも全く熱心に働いている。

バイブル・ウーマンもまた多くの個人的働きをしている。我々の仕事のこの局面は、しかし最も困難であり、他の働きよりも最もゆっくりしたものに見える。事実、我々はバイブル・ウーマンの雇用も含めてこの働きを止めようかと考えている。家庭での私的な働きは男性よりも女性たちによってより良く提供されるのであるが、女性たちも男性たちと同じほど公的礼拝に出席することが自由であるので・・・。

AN 2666 1900 (明治 33) 年 5 月 11 日 アーカンサス ホットスプリングス SBC.

34 頁. N.メイナードからの報告

我々は今年、門司、小倉、若松そしてしばらく、アハシで働いている。門司の奉仕は日曜学校と日曜朝の礼拝の説教、そして、毎週水曜日夜の説教とから成っている。小倉で私と一緒にいる伝道者たちは門司での一週間おきの奉仕の役割を担っており、私は日曜日の残りのもう一つの奉仕をおこなっている。そして川勝さんが水曜日の一つの責任を負っている。日曜学校はメイナード夫人と共に働くバイブル・ウーマンの一人によって導かれている。こうして門司での働きは、年間を通じて継続的に我々の中から 4 名が参加している。日曜学校の出席者の平均は、10 名から 12 名であるが、多くの人々がやってきて、中に入るのは拒絶しつつもドアの中で立っているものもあり、教えられる学課は登録された生徒の数の倍以上となっている・・・

AN 2669 1901 (明治 34) 年 5 月 10 日 ルイジアナ州 ニューオリンズ SBC.

43 頁. W.H.クラーク宣教師 (熊本) の報告

熊本における我々の仕事チームは、あなたがたの宣教師とその妻、一人の日本人の伝道者とその妻、一人の教師から成っており、私は日本人のバイブル・ウーマンを得ることを希望している。我々は長く設立することを希望している一教会の核として、8 名の日本人クリスチャンをもっている。昨年 4 名の受浸者があり、数人が最近クリスチャンになる興味を持っているように思える。

2) a History of the Baptists by Thomas Armitage the American Baptists

Xiii. Foreign Missions--Asia and Europe.

トーマス・アーミテージ著『バプテスト史』アメリカン・バプテスト XIII. 国外伝道 アジア及びヨーロッパ

(中国) 時には、日に 60 事例の疾患が処置された。そして生徒の多くは創世記とマタイ伝の全体を一語、一語朗誦することが出来た。この時点で、つまり 1886 (明治 19) 年に、東中国宣教団の教会数は 7 つ、会員は 246 名、中国人説教者は 13 名、バイブル・ウーマンは 4 名、学校は 6 つ、生徒は 184 名であった。

3) Excerpts from the Foreign Mission Board's Annual Reports to the Southern Baptist Convention 1896-1913. SBC.

サザン・バプテスト連盟への外国伝道局年次報告からの抜粋 1896 (明治 29) - 1913 (大正 2)

AN 2657 1896 年 5 月 8 日 テネシー州 チャットヌーガ SBC.

2 頁. ハートウエル女史によるツンチョウ宣教の報告

いろいろな家庭訪問は、しばしば大変勇気付けられるものであった。もし時間と場所が許されれば、私は興味ある幾つかの事例を話すことが出来た。そんなに以前ではないが、私のバイブル・ウーマンは以下のように述べた。「クーニャン、我々は殆どいつも、主がその日、準備され待ち焦がれている人に与えるべき、我々のための特別なメッセージを伴って、目的を持って私たちをある特別な人たち、あるいは場所に導かれたと感じることなしに家路に着くことはありません」。そして真にそう思えるのであった。

15 頁. 諸教会 報告された 404 名受浸者から見られるだけでなく、クリスチャンたちが恵みと力において成長したことの中に見られるように、諸教会の伝道的働きは大いにこの年祝福された。諸教会の幾つかは真のリバイバルを喜んだのである。指導する求道者とクリスチャンのためのクラスは多くの恵み深い結果を伴って、あらゆる伝道所で開かれてきた。56 名の伝道者たちとバイブル・ウーマンたちが滅び行く者の救済のための義務の重荷を負っており、多くの新しい場所でみ言葉を説教している。

16 頁. 秋学期は学校の働きの 3 年間で締めくくった。この期間中、約 45 名の女性が登録された。ある人たちは一年間、ある人たちはそれより長く学んだ。この人数の中から、2 名が 3 年の研究コースを修了し、彼らの故郷の教会でバイブル・ウーマンになるであろう。

この学校の人材は、やもめや神学生の妻から成っており、たとえ彼らのすべてが永続的なバイブル・ウーマンにならなくても、彼らはよりよい妻であること、母であること、中国でクリスチャンホームを作ることを学ぶだろう。ここで過ごした時間は無駄にはならないであろう。

寄宿舎と平日学校

我々の学校の働きは組織化されてきている。そしてその結果はこの方法の正当性を証明している。それらは伝道センターである。我々の 48 日学校は 691 名の生徒登録を記録している。ここで生徒たちは我々の 8 つの寄宿舎に入学するために準備される。そしてそれらは一人の外国人の注意深い監督を有している。北中国学校は殆ど沢山の教師と説教者の人数を我々に与えてきている。ブッシュ神学校

と女性訓練学校は、訓練された伝道者とバイブル・ウーマンたちのための増大する要求に確実に応えている。

18 頁. ワンジェン。

伝道的働き——（１）男性たちの間での働き この伝道所の 4 名の男性宣教師の内の 2 名は、全く神学校に専念している。一人は彼の時間の殆どを少年寄宿舎に与えねばならなかった。そしてもう一人は彼の医療の仕事に従事してきた。かくしてワンジェン付近のこの地区での現実の伝道的説教の多くの部分は土着の中国人アシスタントたちに与えられた。彼らはその仕事において主に、ある一人の人によって指導されて来たが、彼は自分の手に伝道的たくわえを持っており（資金なのかあるいは伝道のノウハウなのか文脈だけでは判然としない）、彼らは支援とアドバイスと同情とを求めて彼のところに向いていき、彼らが必要であると思うことは何でも、牧師の心をもった父のところに行くようにして決して欠乏を持って帰ることはない。神学生たちは少なからずこの仕事のため役立ってきた。一年に 3 回会合を持つ働き人の協議会は、大いなるインスピレーションと励ましの源である。このために、すべての信徒伝道者たち、コルポーター（本来行商する者という意味であるが、聖書売り歩く者、あるいは福音を宣伝する者）、学校の教師そしてバイブル・ウーマンが出来る限り参加して彼らの仕事、機会などを報告する。そして最近の会合以来、未来の仕事のための計画について協議する。南門の中のチャペルは福音を聞くために何百という人々に機会を提供しており、幾人かは教会に加入している。

（２）女性たちの間での働き この仕事は働き人の欠乏を覆っており、一連の女性宣教師たちがこの分野で不在である。しかし残っている人たちが、土着の中国人の姉妹たちの助けによって、とても立派に前線に結集し、彼ら自身の仕事だけでなく、不在の人の仕事の多くも維持した。3 回の長期旅行と多くの短期旅行が郡部に向かってなされ、チャオユン、ライヤン、そしてチャヒア地区に出て行った。ワンジェン自体では、女性のチャペルが規則的な日曜午後の女性の会合を開き、そして女性たちと日曜学校の子どもたちと、彼らの指導者に沿ってこれらのやるべきことを彼ら自身で行う中国人の姉妹たちとが集まる規則的な日曜午後の会合を開いた。30 人以上の会員を持つ女性宣教協会は、今年中に非常に興味深い月例会を開き、二ヶ月間一人でバイブル・ウーマンを支援し、彼女をこの夏の期間送り出し、そしてそれが今や、ここ数年の習慣になっているように、厳しい冬中、貧しいクリスマスチャンたちを助けた。

女性の働き—— 40 名の女性たちがこの年受浸し、7 つのピンツ教会の交わりに加えられた。これは昨年より少し良い増加を意味しており、そしてさらに、ここ数ヶ月を振り返ってみると、完遂されるべきであるが、なされていない仕事が残されているように思える。あらゆる側面で門戸は開かれており、幾つかの楽しい価値ある旅行が郡部に向けてなされてきた。また何がしかのことが付近の村々の家から家への訪問伝道の仕方でも成し遂げられてきた。そして日曜学校と日曜午後の集会在以前のようにつながられた。9 名のバイブル・ウーマンがこの年雇われ、一人はあらゆる訪問者を迎えるために新しいクラスルームに残っており、他のバイブル・ウーマンは一人で働くか、あるいは二人ペアになって郡部で働いている。我々の最も忠実な働き人の一人がコレラに罹り、彼女の報酬を返却した。幸いにも、ライチョフにある訓練校で学んでいる 7 名の学生の一人がこの学期にコースを修了し、すぐにバイブル・ウーマンとして仕事を始めることができる。

4) Church Missionary Society 157, Waterloo Road, London SE1 8UU

Catalogue of the papers of the Church of England Zenana Missionary Society 1872-1968.
1987.

教会宣教師協会 ロンドン ウォーターロー通り 157 番地

1872-1968 年の英国教会ゼナナ宣教師協会の報告書カタログ

(導入) 英国教会ゼナナ宣教師協会は 1880 年に設立され、その時、超教派インド女性標準学校協会 (1852 年設立) から分離した。その主要な目的は、標準学校 (教師訓練単科大学)、ゼナナ訪問、医療伝道、ヒンズー・モスLEM女学校そしてバイブル・ウーマンの雇用という手段でインドの女性たちに伝道することであった。

5) Asian Journal of Pentecostal Studies 4/2(2001).

ペンテコステ研究のアジアジャーナル 2001 年 4 月 2 日

日本神の教会の戦前史への新しい一瞥

266 頁. 10. 結論

この論文において、私は日本神の教会の戦前史を吟味しようと試みた。その歴史の穴の幾つかを埋め、そして他のいまだ曖昧な分裂、あるいは論争の領域を指摘した。日本に保存されている資料の欠如と利用しうる資料の幾つかが信用できないという理由で、この仕事は決して簡単なものではなかった。にもかかわらず、私は特に、日本神の教会の歴史から削除された宣教師たちを見つめた。しかし、私は忘れられた日本人の働き人たちを研究しなかった。戦前の宣教師たちにとって、通訳者たち、土着の日本人の働き人、そしてバイブル・ウーマンを得ることは重要であった。宣教師たちの削除と共に、彼らと共に働いた日本人の働き人も日本神の教会史から失われてしまった。・・・

合同キリスト教会の隠された歴史：女性たちの働きと女性局

初期においてあらゆる女性局において、彼らの働きを形づくった幾つかの重要な原則が採用された。まず、彼らは第一義的に、女性たちの必要に奉仕するために存在した。それらは単身で働くフィールドにおける女性宣教師たちを支援し、有能な土着の「バイブル・ウーマン」を雇うことを力づけた。第二に、アメリカン・ボードへの献金を減らさないような仕方で基金を設立しようとした。しかし彼らは、ある年にお金を集め、次の年にそれを使うことを一つの政策とした。・・・

文献紹介

* バイブル・ウーマンに関する文献

- ・ 宍戸朗大著『バプテスト派の初期伝道誌 東北伝道とバイブル・ウーマン』耕風社, 1995年
- ・ 大島良雄著『日本につくした宣教師たち』ヨルダン社, 1997年
- ・ 大島良雄著『灯火をかかげて』ヨルダン社, 2002年
- ・ 大島良雄著『バプテストの東北伝道 1880-1940年』ダビデ社, 2005年
- ・ 竹中正夫著『ゆくてはるかに 神戸女子神学校物語』教文館, 2002年
- ・ 戸田義雄著/永藤武著『日本人と讃美歌』桜楓社, 1978年
- ・ 鈴木正和「偕成伝道女学校、共立女子神学校、そしてバイブルウーマン—失われた姿を求めて—」東京基督教大学、共立基督教研究所『教立研究』Vol.VII No.1 2001年8月31日
- ・ 枝光泉「バプテスト女性の歩み」日本バプテスト女性連合『世の光』2005年4・5月号
- ・ 松山バプテスト教会50年誌編纂委員会『喜び・祈り・感謝! 1952~2005』2005年

* その他の文献

- ・ 坂井信生著『明治期長崎のキリスト教 カトリック復活とプロテスタント伝道』長崎新聞社, 2005年
- ・ 枝光泉著『宣教の先駆者たち—日本バプテスト西部組合の歴史—』ヨルダン社, 2001年
- ・ 高橋昌郎著『明治のキリスト教』吉川弘文館, 2003年
- ・ 盛岡清美著『明治キリスト教会形成の社会史』東京大学出版会, 2005年
- ・ 斉藤剛毅著『バプテスト教会の起源と問題』ヨルダン社, 1996年
- ・ デイヴィッド・ボッシュ著『宣教のパラダイム転換 上』新教出版, 1999年
- ・ デイヴィッド・ボッシュ著『宣教のパラダイム転換 下』新教出版, 2001年
- ・ 牟田和恵「『良妻賢母』思想の表裏 近代日本の家庭文化とフェミニズム」『女の文化 近代日本文化論8』岩波書店, 2000年
- ・ 日本バプテスト連盟歴史編纂委員『日本バプテスト連盟史 1889-1859』1959年
- ・ 日本バプテスト連盟・宣教80年史編集委員会『バプテスト宣教80年の歩み 〈目で見る連盟史〉』ヨルダン社, 1969年
- ・ 日本バプテスト連盟50年史編纂委員会『日本バプテスト連盟50年史』1997年
- ・ 横浜プロテスタント史研究会編『図説 横浜キリスト教文化史』有隣堂, 1992年